

創立 40 周年記念の年のプログラムについて

大村 恵美子

新年おめでとうございます。いよいよ私たちにとっては、合唱団創立 40 周年の記念すべき年であり、5 月 12 日の「ミサ曲口短調」が終っても、12 月まで記念行事はつづくのです。

いま予定されている 3 つの演奏会は、

- ① 2002 年 5 月 12 日 (日) 第 91 回定期演奏会
「ミサ曲口短調」BWV232
- ② 2002 年 8 月 野尻湖神山教会特別演奏会
カンタータ BWV104「まきびと 主よ 聞けよ」
カンタータ BWV124「イエス とともにあらん」
カンタータ BWV150「なれを 主よ われは仰ぐ」
- ③ 2002 年 12 月 第 92 回定期演奏会
「マニフィカト」BWV243 / 243a
カンタータ BWV61「いざ来たりませ 世の救い主」

については、早くから PR もし、何人もの新旧団員が加わるという意思表示をしておられますので、層の厚い歌声が見込まれます。1987 年 (創立 25 周年)、1992 年 (創立 30 周年) につぐ、3 回目の演奏となります。

は、以前に月報でお知らせした通り (2001 年 11 月号)「カンタータ 50 曲選」第 3 集の中から、3 つのカンタータを選んで、抜粋で演奏します。3 曲とも 2、3 回演奏したことのある、なつかしい名曲です。(最近の演奏 BWV104 : 1994 年、BWV124 : 1998 年、BWV150 : 1997 年)

「マニフィカト」は、1967 年、1972 年 (創立 10 周年)、1993 年につぐ 4 回目の演奏です。毎回 BWV243a のコラール変奏曲 4 曲を含めて、二長調で演奏してきました。今回も同じにいたします。

この第 92 回定期演奏会には、もう 1 曲、カンタータ BWV122「新たに生まれし みどりご」(降誕節第 1 日曜日用、1724 年ライブツィヒ初演)を、と考えていましたが、諸般の事情で、BWV61「いざ来たりませ 世の救い主」(待降節第 1 日曜日用、1714 年ヴァイマル初演)と差しかえることにしました。歌い終わったばかりの BWV36 との関連を、プログラムの解説にもいくぶん詳しく書いておきましたが、初期

の素朴さと緊張感に溢れるこのカンタータは、「50 曲選」第 2 集に入っていて、団員の皆様はすでにお持ちですから、BWV36 にひきつづいて演奏できれば、興味もひとしおではないでしょうか。

このほかにも、2002 年は私たちにとっていろいろ有意義な行事が備えられることと思います。皆様の積極的なご参加を期待しています。

第90回定期演奏会

2001 年 12 月 16 日、石橋メモリアルホール
カンタータ第 36 番 喜びのぼれいと高き星に
クリスマス・オラトリオ 第 1 部、2 部、3 部

第90回定期演奏会に参加して

重藤 栄子 (団員)

「宗教音楽のなかに自分を置いてみたいと思わない?」梅干野(ほやの)さん(恵泉高校・国立音大で同期)の誘いが、今回バッハ合唱団のメンバーとして初出場することになったきっかけです。

生まれた頃より聴いていた教会音楽が、私にはどうしても本物の音楽に思える。クリスマスイヴの明け方には、経堂北教会のクリスマスキャロルが桜上水の我が家へまわってきて歌ってくださるのが習わしでした。その中に、川戸さん(テノール)や、今回私のとなりで、いろいろお世話くださった中西碧さん(ソプラノ)たちがいらしたのです。

数えきれないほどの神の不思議なみわざがあり、恵泉高校のとき、初期のバッハ合唱団員だった先輩の影響で、ずっと合唱団で活動するのは夢だった。が、ピアノの勉強等で叶わず、その後も結婚してピアノを教えたり子育てに追われたり、行き詰まっていたところ、8 年ほど前、荻野さんより EM コーラスに誘っていただき、大村先生にたどりついたのです。

その後、EM コーラスにお誘いした高橋さん、梅干野さんは、お嬢さんがパイプオルガンをされてい



る関係で、バッハの音楽に興味を示され、7月より一績にバッハ合唱団に入団することになったのです。

さっぱり歌えないような状態で困り果てていたのですが、管弦楽団のなかで音楽することは、小さい頃からの夢だったため、オケ合わせのときは、とくに幸せでした。

オルガンの草間美也子先生は、お父様(奥田耕天先生)のご葬儀当日にもかかわらず、駆けつけてくださいました。録音の柳沢さんは、ご病気で入院中とのこと、カンタータ第36番のコラール斉唱「主のみ力はわれらの病める身にも宿りたもう」を捧げましよう、ということになりました。

当日、佐々木まり子先生による発声練習を経て、いよいよ舞台に立ったときは、ドキドキしたが、知っている人(E Mのメンバー他)の顔が見えると同時に、天国に召された方々も集まって応援して下さっているのが感じられ、急に落ち着いて、力がわいてきた。「バッハでは、子守唄と永眠の祈りとが同じ表現で扱われるように、生と死があるのです」という大村先生のお言葉には、まったく同感です。

会場の音響の影響もあってか、男声パートが会衆も歌いだしたかのように力強く聞こえて、とても気持ちよく歌えました。オルガンがすぐうしろで自然に支えてくださり、歌いやすかった。終りに近づくにつれて、大村先生のお顔が輝きを増して感じられた。満場でわれんばかりの拍手もうれしかった。40年90回にわたる経験と日ごろの努力あってこそその結果だと思いました。

聴きに来てくださった方たちから「感動した」とか、「合唱団はアマチュアなのに、なかなか元気がよかった」という感想をいただいた。「合唱団は輝いていた」という言葉も印象に残った。大村先生の表情の変化は、私たちの表情の変化になって、会場に伝わったのだと確信しました。独唱の先生方、管弦楽団の方々の演奏とも、とても良かった。

日本語でバッハを歌うこと、クリスマスの喜びを

歌うこと、小さい頃から学んだバッハの音楽を、自分だけにとどめずに、人々と共有できたこと、すべてに感謝し、この厳しい世界の中であって、平和を祈り、これからも歌っていきたく願っています。

時間と空間を超えたバッハの宇宙的音楽に触れることは、人間的制約から解放されることだと、深く感じています。

ほやの
梅干野 幸子(団員)

“いつか宗教曲を歌いたい”という思いは、この12月16日に実現し、21世紀最初の年に初舞台となり、第1歩を踏み出しました。1962年創立以来の歴史ある合唱団の一員として歌うことができたことは光栄で、いろいろな意味で自分自身に大きな力を得たような気がいたします。

思いおせば2年前、友人の勧めでEMコーラスに入り、大村先生ご指導のもと、楽しく参加しておりました。それからバッハ合唱団の存在を知り、昨年7月より現在にいたります。

演奏会に向けて、練習期間が短かったこと、音取りが難しいこと、16分音符の歌い方、等々、初めてなので大変苦労しましたが、先生のバッハ作品に対する見解の深さ、メンバーの方々との温かい人の和とバッハを歌う情熱に触発され、やっとの思いで本番に臨むことができました。歌い終わったときの達成感、近ごろでは味わったことのないもので、30年前の学生に戻ったような、楽しく、幸福な日でした。

たくさんあるバッハの曲を、これからどのくらい歌うことができるのだろう。そんなことを考えるとわくわくします。

今、信じられないことが次々と起こる世の中となり、「地には平和」のメロディーが頭から離れません。われわれの歌声がどこまで届くでしょうか、祈るばかりです。

大村先生、合唱団の方々、これを支える皆様に感謝して、良き2002年を迎えたいと思います。ありがとうございました。

会場アンケートから

胸が一杯になって涙が出るほど美しいでした。演奏の完成度も高いと思いました。合唱では、コラールがよく歌い分けられていて味わい深かった。小人数ながらテノールがとてもよい響きだった。オーケストラの控えめな味わい深い演奏と、日本語を大事に歌われるソリストのりっぱな歌唱が心を暖かくしてくださった。特にソプラノの軽やかさが印象的でした。アルトの名曲、テノールのみごとなエヴァ

ンゲリスト...、バスのアンコール曲（宗教歌曲「思ってもみよ」）もすてきでした。管楽器の豊かな音色、男声ソロの力強さが印象的。合唱のアンサンブルもなかなかのものだった。次回の「ミサ曲口短調」も期待されますね。久しぶりの「クリスマス・オラトリオ」に感動しました。暗かった2001年に、息を吹き返させてくださった団員の皆様に感謝。

団員から

練習に出られなくて、今回は客席で聴かせていただきました。ふだん自分のパートを歌っているときには分からない、総合的な音楽が楽しめ、得をしたような気分です。プログラム上の大村先生のメッセージにも心打たれました。同行の友人も真剣に読んでおりました。今年も参加できてとてもうれしく思っています。長年演奏会に来てくれていた友人が病気で来られなくなり、以前大村先生が録音テープを送って喜ばれたと話されたのを思い出して、プログラムとテープを送りましたら、とても喜んで、「私にとってこれを聴くのが至福の時」と言われました。かえって私のほうが勇気づけられ、歌っていてよかったですと思いました。私の生活・人生の大きな部分を占めるようになりました。今回新しくお招きした方は、音楽にずっと入っていた、聴衆の全てがそのように感じられた。胸がキューツとなるように感動するところがあったと、喜んでおられました。これから毎回お誘いすることにしました。

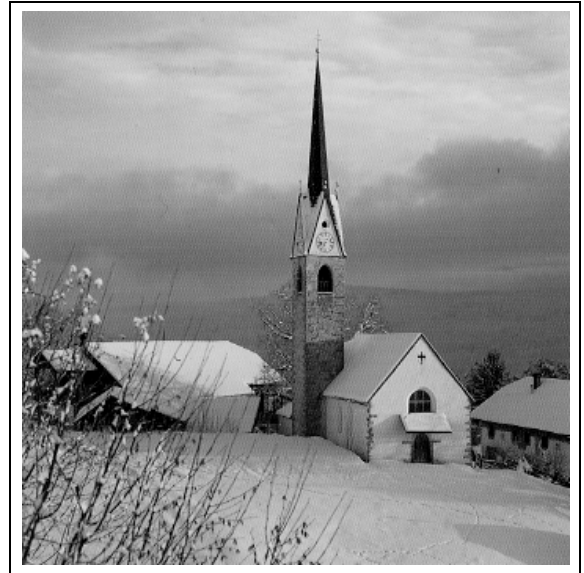
団友・後援会員から

会報で反戦の旗を高く掲げておられることに敬意を表し、このこと一つだけでも応援しなければならぬと思います。こういう旗を掲げる合唱団には聴きに行かない、と嫌味を言う人がきついていると思いますが、戦時中の音楽界がみごとに挙国一致体制に組み入れられた過ちを繰り返さないように、がんばっていただきたく願っています。芸術三昧の芸術家が多いようですが、日本社会のひずみに対しても戦っておられるピアニスト崔善愛さん(註)や大村先生のような芸術家を知ることは、大いに勇気づけられます。(註：チェ・ソソエ。岩波ブックレット『自分の国を問いつづけて』の著者)

ドイツから2つのクリスマスカード

一枚の13世紀絵画の写真を添えて、クリスマスおよび新年のご挨拶を送ります。

1年前に年末年始の挨拶を出して以来の時の流れのなんとあわただしく、またこの1年になんと多く



の大小さまざまな出来事が生じたことでしょうか！去る9月の一連の事件は世界中に驚愕と未来に対する不安とを惹き起こしました。...

特筆すべきことは、秋の3週間におよんだ日本旅行です。ボンヘッファーについて何回か講演し、またバルトとボンヘッファーに関する立派な会議が催されました。もちろんそれだけではなく、私たちはじつに多くのものを見ましたし、日本の同僚、知人、友人との多くのよき出会いがありました。...

滞在中、数々のお心遣いと美しいお花をいただきまして本当にありがとうございました。お礼申し上げます。かくも多くの印象を心に刻んでくれた日本の日々を想い起こしては、うれしい気持ちになります。今後クリスマスにバッハの「クリスマス・オラトリオ」、あの大いなる喜びをわれわれに授けてくれる曲を聴くときに、あなたのことを思い出すことになるでしょう。

どうぞよいクリスマスと2002年をお迎えください。

メヒティルト & エルンスト・ファイル挿

心をこめてクリスマスのご挨拶をケルンより東京へ送ります。この時節には、バッハ合唱団はさぞかしご活躍中のことでしょう。こちらでは、私たちはクリスマスの平和の福音に真剣に耳を傾ける努力をしています。また、12月24日夕べの礼拝には、「ながかたえに立たん」(Ich steh an deiner Krippen hier)を歌う予定です。

新年のご多幸を祈ります。ひょっとすると、新年にはもう一度ドイツ旅行のご計画でも？ そうなればいいですね。心からご挨拶申し上げます。

ウルリーケ・ゲーブハルトより

モフセン・マフマルバフ著

『アフガニスタンの仏像は破壊されたのではない、恥辱のあまり崩れ落ちたのだ』を読んで

山下 広之（団員）

2001年3月、紀元1世紀後半から数百年にわたって興隆したガンダーラ美術の1つとされる、アフガニスタンのバーミヤン石仏がターリバーンによって破壊されたというニュースは世界を駆け巡り、アフガニスタンはとんでもないことをすると、世界が憤激したことは記憶に新しい。前年の2000年12月には国連がアフガニスタン経済制裁強化を決議し、徹底的に締め上げる措置をとった。尚それ以前を辿ると、1999年11月に国連安保理がアフガニスタン経済制裁を発動し、1988年8月にタンザニアとケニアの米大使館爆破の首謀者はターリバン政権が匿うビン・ラーディンだとして、米軍がアフガニスタンを空爆している。

もともとアフガニスタンはイランと同一の国であったのが約250年前独立した。だから多くのアフガニスタン人はイランと同じ言語を話す。ところが一方のイランは石油が出て経済的に豊かになったが、アフガニスタンには石油がない。またその国土の75%が山岳地帯で、農業に利用されている土地はわずかに7%だけ、それも大部分が常に旱魃の脅威にさらされているという。そのため外国に売る物が無い。僅かに年5億ドルのアヘンだけという有様である。世界の麻薬の50%をアフガニスタンが供給している。またソ連でさえ征服できず逃げ出した深い峡谷で仕切られており、国民は互いに交流が出来ず、これが部族同士の争いの起きる原因となった。争いのため地雷が無数に埋められ、毎日7人が地雷を踏む事故に遭っており、このままでは今後50年は安心して農業ができないといわれている。ソ連との戦争に続く部族同士の戦争に国民が飽きてきた隙にターリバーンが政権を獲ってしまった。

平均寿命は約40歳で、これより下はエイズ等に悩むアフリカのザンビア等くらいである。また5歳未満の幼児の死亡率は25.7%で、これより悪いのはアンゴラ等アフリカの3カ国のみである。また識字率は36%で世界で最低の部類である。就学率は30%以下で172カ国中下から15番目であり、女子の就学禁止を実施しているのはアフガニスタンだけである。人口の半分を占める女性は教育も受けられず外出の際は顔を隠さねばならない。

人口2千万人のうち30%の600万人は国を捨てて難民となり、10%の200万人は餓死や戦争で死んだ。そして2001年の夏に大旱魃が起き、現在100万人が餓死寸前にある。難民の300万人はパキスタンに行ったが、パキスタンでは難民の孤児を2500の収容所（神学を教える学校）に入れ食料を与えて職業的な神学生（ターリブ）とした。そして国際法上ではイランは6年前にアフガニスタンと接している地域（国土の約半分に当たる）をアフガニスタンに返却しなければならない事になっているのを、ターリバーンに政権を獲らせて傀儡政権とし、国土返還の文句が出ないように利用したのである。どうしてアフガニスタンはこのような最低の国になってしまったのか。これはもともと貧困であること、部族同士の争いが絶えなかったこと、ソ連との戦争で国土が荒廃してしまったこと等に起因している。

加えて昨年9月11日、ニューヨークの高層ビルで同時多発テロ事件が起き、10月から米・英によるアフガニスタンへの報復の空爆が始まった。またイランの難民キャンプにいる250万人の難民がアフガニスタンに追い返されようとしている。そうすると彼らは餓死するしかない。

著者はこのような救いようの無いアフガニスタンの有様に、「バーミヤンの石仏は神としての自分の力など何の足しにもならないことを痛切に恥じ、みずから崩れ落ちてしまったのだ」と表現するのである。神からも見放されたアフガニスタンの人々を世界の人は無視してしまっている。正確に理解していないし、助けようとしなない。石仏の破壊は報道するが人民の苦しみをメディアは全くと言ってよいほど報道していない。石仏の破壊のほうが重要なニュースとなり、100万人が今飢えて死にかかっていることは報道されない。人間より石仏のほうが大切なのだろうか？世界はアフガニスタンを見放すだけではいけない、ということを強く著者は訴えている。

著者のモフセン・マフマルバフ氏は54歳、イランの著名な作家・映画監督で、アフガン難民の男を描いた「サイクリスト」がヒットし、日本では2000年の「パンと植木鉢」、「ギャベ」が話題を呼んだ。2001年に「カンダハール」を作り、これから日本で公開されようとしている、世界的に注目を浴びている映画監督である。

アフガニスタンを単なる報復の対象としてみるだけでなく、そこに生きる人々の苦難に関心を持つべきであるとの本を読んで強く思ったのである。（武井みゆき・渡部良子訳、2001年11月30日、現代企画室刊）